

## 7月26日「もうダメだ!と思った時に・・・」使徒言行録27:33~44

先週はパウロが捕らえられ、ローマ総督の前に引き出されながらも必死にイエス・キリストについて証しをした物語を聞きました。今日はその続きです。結局、総督はパウロに何ら罪を見出すこと出来なかったので釈放しようとしたのですが、パウロ自身が皇帝へと上訴を願い出たことにより、エルサレムからローマへと移送されることになりました。(聖書の巻末9の地図をご覧ください。)エルサレムからローマへは地中海を船で行くこととなります。クレタ島の「良い港」を出たところでパウロ達を乗せた船が嵐に遭いました。暴風は酷く、船の操縦はままなりません。結局2週間も船は地中海を漂うことになったのです。いつ嵐は止むのか、船は港につけるのか、全く先が見えません。何度も航海を乗り越えてきたであろう船乗りたち、いくつもの戦争を生き抜いてきたであろうローマ兵たち、屈強な男たちが全部で276人も乗り込んでいたと書いてありますが、船中、皆が不安と恐怖でいっぱいだったでしょう。しかし、その中で一人だけ希望に満ちている者がいました。そう、パウロです!「**元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。**」パウロは嵐の船のなかで、天使からの語りかけを聞いたと言います。不安の中にあつた人たちは、パウロの言葉に励まされたことでしょう。

そして14日目、ついに船が陸地に近づいてきました。希望が見えると同時に、他の恐怖が出てきます。もし暗礁に乗り上げてしまったら、船は木っ端みじん。全員おぼれ死んでしまいます。人々の心は騒ぎ立ったでしょう。囚人も護送者も関係なく、皆で力を合わせなければ生き延びることは出来ません。けれども、人間、自分が一番ですから、中には小舟で逃げ出そうとする船乗りたちも現れました。皆が動揺し、殺気立つなか、パウロは声を上げました。「**今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。**」この一言で皆の心が一つになりました。兵士、船乗り、囚人たち、身分に関係なく皆で食べ物を分かち合いました。それから協力し合って、船の積み荷を全て捨てて、上陸作業の開始です。途中、船は暗

礁に乗り上げて、破壊されてしまいましたが、奇跡的に一人も命を失うことなく脱出することができたのです。

嵐の中での14日間の漂流です。私も数年前に、桜川が氾濫して牧師間の水没を経験しました。未だに先日の梅雨前線のように降りやまない猛烈な雨に遭遇するともものすごく怖くなります。ましてや、レーダーもコンパスすら（方位磁石の開発はずいぶん後の時代のはず）もない古代の航海ですから、いつ嵐が去るのか、船はどこに流れているのか、先行きが全く見えない恐怖は現代とは比べ物にならないでしょう。それでもパウロは神さまが共にいてくれることを人々に伝えます。「25～26 節 皆さん、元氣を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずですよ。」人々を励まし、パンを分かち合う姿は、私たちに何を教えるのでしょうか。

私たちが今、全く先の見えない暗闇の中にいます。コロナウイルスの難しさは「見えない」ことでしょう。目に「見えない」ウイルスが原因となり人に移っていきます。また、これほど科学が発展した社会であっても特効薬もワクチンも開発される見込みが立ちませんから、先行きもなかなか「見えない」。この暗闇の中で私たちの社会には目に見えない分断がいくつも現れています。都会の人、地方の人。収入が減る仕事の人、変わらない仕事の人。リモートワークが出来る人、出来ない人。コロナを移す若い人、コロナを移されては困る高齢の人。昼の町の人、夜の街の人 etc. とにかく、皆が口を共通して言えるのはたった一つのことだけです。「こんな事態になるなんて想像もしてみなかった・・・」このような先が全く見えない不安な時代においても、私たちはなお神さまは私たちと共にいてくださると言えるのでしょうか？だって考えてみてください。神さまはクリスチャンのためだけに天国から特効薬やワクチンも送ってくださることはありません。神さまはクリスチャンだけ免疫を高めてくださることもないのです。

それでも、私たちが神さまを信じることを辞めないのはなぜでしょうか？それは神さまが“不在”であるように思える、まさにその只中にこそ不思議と神さまの“存在”を感じる、そんな経験を私たちが持つからではないでしょうか。私もこれまで数々の証を聞いてきましたが、平穏安寧な人生を歩んで来られた方が急にイエス様と出会ったということは聞いた経験がありません（もちろんそういうこともあるのですが・・・）人生の転機に、大きな喪失や別れを経験した時に、孤独や痛みに襲われるときに、私たちは、予期せぬ形で、イエス様と出会い、救われる経験をするのです。海に投げ込まれたヨナを魚が救い出すように、エジプト軍に追い詰められたイスラエルの人々の前で葦の海が開かれるように、「もうダメだ！」その直後に思いもかけない神さまの恵みが待っていることがあるのです。

少し話が変わりますが、今、聖書研究祈祷会では、創世記のヨセフ物語を読んでいます。この物語の隠れたテーマは「神の不在」だと思います。父ヤコブ、その父イサク、そしてその父アブラハム、神さまはいつも族長たちに直接語りかけ、行く道を示して導かれます。ところがヨセフの代になるとぱったりと声を聴かせてくださらなくなります。ヨセフは何度も危機的な状況に置かれます。兄たちには妬まれ奴隷としてエジプトに売られてしまいます。売られた先では主人に誠心誠意仕えたにも関わらず、その妻に陥れられ、牢屋に繋がれてしまいます。牢屋でもせっかく助けてやった人たちは、ヨセフのことをすっかり忘れてしまい、恩を返そうともしません。正しいことをしても報われない、人からは妬まれ、恨まれ、忘れ去られる。酷いことだらけのヨセフの生涯で、先代たちのように神さまからの直接の声も届きません。それなのに、不思議なことに聖書は何度もこう語るのです。「**主がヨセフと共におられた**」・・・「え！？どこが？」と思えるのですが、けれども聖書は、神さまはヨセフの側をひと時も離れることはなかったと伝えています。そして、その言葉通りに最後に大成功と家族との和解が待っているのです。

今日は絶望的な状況にあっても、神さまと共にいてくださることを信

頼し、人々を励まし続けたパウロの物語を聞きました。私たちも同じように神さまに信頼する者でありたいと願います。コロナでの自粛中に私が何度も思い出した子ども讃美歌です。「悲しいことがあっても、泣きたいときにも、いつもいつも君のこと、守ってくれるだろう」

また、パウロの在りようは、今の私たちになすべきことを教えてくれます。私たち教会がすべきことは必要以上に怯えることではありません。過剰に防衛することでもありません。希望をもって人々を励まし、語り続けることです。また、パウロは船中の人々が混乱し、分裂し、仲たがいでいく中でも、神さまに信頼し、パンを分かち合いました。同じように私たち教会がすべきことは自分たちの利益の確保ばかりを考えることではありません。共に分かち合い、支え合う共同体となるのです！「イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。『お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』と。（イザヤ書 35：15）」私たちの歩みが神さまへの信頼に根差したものとなるように、また私たちの教会が愛の共同体となるように共に祈りましょう。